

I 夏のフィロソフィア

世界・真理・自由

半開きの窓から入ってくる風のなんと気持ちがいい、あまりに暑いので上半身は裸で机に向かっているわたしの身体の皮膚のうえを撫でるように吹きすぎていく夕暮れの風、窓の向こうはちょうど中庭の木々の梢の高さで、マロニエ、プラタナス……青々と生い茂った夏の葉叢が奥の建物をほとんど隠してしまっていて、しかも庭の片隅では、さきほどから、つぐみが一、二羽、木陰のなかで囀っているようなので、自分が都市のまんなかにいることもすっかり忘れてしまつて、なんだか避暑地の明るい林間地にもいるような感覚になる。今日も一日暑かったが、しかし湿度はそれほど高くはなく、白い石の舗道を踏んで歩いて帰ってきて、汗ばんだシャツを脱ぎ捨ててシャワーを浴びると、夕食の時間まで

ぼっかりあいた空白の時間に、少しなにか書きたくなってきて、まるで人氣のない夏の公園、砂場の隣あたりにある水道管の蛇口をひねると生温かい水がちよろちよろと流れ出す、そんなふうにならなく書き出してみるの、今日一日、いや、この数日、それどころかもっとずっとずっと以前から心の片隅にわだかまっていた欲求に形を与えてみてでもいいかもしれないという思いからで、その願いはただひとつ、この生温かい乏しい水をそれでもしばらくは掌で受けているうちに、突然に、それが鮮烈に、地下の深さを感じさせる冷たい水となつてほとばしり、飛び散る、そんなささやかな、子どもじみた歓びの瞬間よ、来い、水よ！ 深い水よ、来い！ とただそれだけ。いかにも不用意で無防備な願いではある。

だが、その水は、もしほんとうに来れば、湧出、氾濫、そして洪水。だから、かつて少年ランボーが書きとめた、あの「湧き上がれ、池よ！」(Sourds, étang) 、あるいは「昇れ、走れ——水よ、悲しみよ、昇れ、持ち上げろ、大洪水をふたたび」(—montez et roulez, —Eaux et tristesse, montez et relevez les Déluges) (『イリュミナシオン』) というあの激しい願いの残響が、このわたしの小さな夕暮れの部屋にも、遠い雷鳴のように、轟きわたっていないわけではないのだ。わたしは、昔から、この「池」(étang) を、いつもフランス語で

は音が同じになる「存在者」(étant)と読んできた。そして、その場合、「湧き上がれ！」(sounds) という動詞はいつも同音異義の形容詞「耳の聞こえない」(sound) として響いていた。耳の聞こえない存在者よ、何も聞いていない存在者よ、その淀んだ水を破って、清らかな、それゆえ必然的に悲しい、存在の水よ、湧き上がれ、迸れ！——その願いだけが、明るい夏の夕暮れのぽっかりあいた無為の時間にわたしがはからずもはじめてしまった、いったいどこに向かつて、どのように続いていくのか皆目わからない、この彷徨的なエクリチュールのたつたひとつの存在理由である。だから、もとより書かれるべき何かがあるわけではない。言明されるべき対象があるわけでもない。言われることは、何が言われるにしても、たいして重要ではない。ただ、わたしが抱え込んだ多くの鈍重な思いこみ、いくつもの無意識の規制を打ち破り、かいくぐり、解き放たれて、真理であれ狂気であれ、はてまた無意味無意義ですらあれ、純な言葉が流れとして迸るのを、それがどれほどか細いものであっても、待ち、保ち、掬い続けようとするのが重要なのだ。

真理であれ狂気であれ——そう、わたしは言った。それははからずも、はじめから海図も羅針盤もなく漂流することを決意したこの奇妙なエクリチュールがみずからに定めた、まるでオブセクションにほかならないひとつの方位星を指示しているので、それは、なん

と真理である。ありていに言えば、わたしは、「真理」という言葉が、自分にとって、そう、あくまでもわたし自身にとつてなのだが、なにを意味するのか、知りたい。わたしのこの生、平凡でとるに足らず、幸福でも不幸でもないこの生にとつて、「真理」なるものが、なにか決定的な意味を持ち得るのか、そうでないのか、そのことをはっきりさせたい。だが、そんなことを、真夏の午後の光に照らされた劇場前の広場に面したカフェ、その大理石の柱列の下で、緑色のペリエ・マントを飲みながら、ぼんやりと考えていても、なにもわかつてはこないどころか、ますます混乱するだけ。とすれば、この混乱そのものをそのまま書くしか脱出する途はない。書くことのなかに必然的に含まれる自動性（オートマティスム）だけが、人間のほかのどんな活動によつても、思考によつても、単に言うことによつても、到達できない根源的な受動性に人を導くことができるので、その受動性の過激さがいまのわたしには唯一の頼りなのだ。

だが、わたしがこのように言うことのうちには、すでに真理なるものに対するある構え、あるいは直観のようなもののはっきりとうかがわれるのであって、わたしは、その直観がいったいどこにわたしを連れていくのかを、人生に一度くらいは——いや、むしろ、たった一度だけだ、という厳しい制約のもとに——試してみたいのだが、つまり「書く」こと

のうちにしか、たぶん——いまのところは、いまのわたしにとつては——真理との関係（という言葉もあやしいがいまは立ち止まらない）に入る術がないだろう、という直観である。もちろん、真理なるものが、それとの関係にわたしが入る、というような言い方をゆるすものであるのかは疑わしいが、しかしわたしは、わたしという存在がすでに真理なるものとなんらかの本質的な関係にある、が、それがどういう関係なのかは、わたし自身には少しも明らかではない、と前提的に考えているのである。

この「わたしには分からない」という事態を、ここでは、わたしは無明と名付けておく。無明というこのあからさまに佛教の文脈から持ち出された言葉を書きつけた途端に、わたしの脳裏には、わたしが進んでいこうとしているのは、ただ、この無明がそのままで《無の明かり》となる地点なのではないかという予感が、閃光のように、走るのだが、いや、それを言うのはあまりに性急すぎる、たとえそうだとしても、ただそう言うのではなく、実際に、ひとつの旅として、そこまで辿りついてみなければならぬのだ。逆に言えば、それだからこそ、どうしても「書くこと」（エクリチュール）が不可欠なのである。エクリチュールは、すでに分かっていることをただ物質的に転写するのではなく、分からないことのうちで、分からないこととともに、書き進むことである限りにおいて、無明を発現

させる。無明を無明として経験することを可能にしてくれるのである。実際、そうでなければ、われわれはいつたいどのようにして、みずからの無明を自覚することができるだろうか。

われわれは、この世界にあつて、ひとつの明として、識として、存在している。わたしは、わたしがこうして座っている机のまわりを、その向こうの書棚を、そして窓の外の光景をこんなにもはつきりと意識し、認識している。陽が落ちて、木々の緑の向こうの空は、その透明な青の深さを増して、そのなかをときおりアマツバメの編隊が波打つ弧を描いて通り過ぎていく。わたしは確かに世界の、ということとは、この唯一の、誰にでも等しく開かれた世界の内に存在し、しかもそれを内側から照らし出し、意識している。わたしが識ることのできる範囲は限られており、それは、けつして汲みつくすことのできない世界の広大さ、膨大さ、限りなさには比べれば、ほとんどるに足らない微塵の範囲にすぎず、無意味なほどに限定されているが、しかしそれでも、わたしは世界を認識し、世界のうちにあるみずからをそのようなものとして自覚し、世界とともに存在している。どれほど条件づけられ、制約されていようと、ここには地平としての明るみがあり、開けがある。わたしは、夜のなかの燈台のように、世界のなかのひとつの明なのだ。

もちろん、わたしの認識が間違えるということはありうる。明が錯乱や錯覚ではないという保証はどこにもない。しかし、それでもなお、その認識の表象がどのようなものであれ、世界の内のこの明の開けのなかで、世界がつねにすでに与えられていることは確かである。しかも、わたしの明がどれほど、条件づけられ、制約されているようにとも、世界そのものは、はじめから一挙に、誰に対しても、わたし以外のすべての他者に対しても、唯一のものとして存在している。世界は、断固として、決定的に、わたしに先立ってある。世界はつねにすでに与えられてある。そして、わたしは、その世界の内に、つねに遅れてやって来たものとして、存在しているのである。

世界とは、わたしがそれと釣り合いを保った関係を考えることができるような対象なのではない。それは対象のひとつなのではない。それは地平、つまりわれわれにとつての存在の規範的な地平であり、与えられてある存在の全体性であり、また、限りなさであり、けっしてわれわれのほうから出発して構成するものではない。世界とわたしは、圧倒的に不均衡なのであり、実際、いまこの瞬間にわたしが、突然の出来事によってこの世界から消え、不在になるとしても（それはいつでも起こりうる）、しかしこの同じ唯一の世界は、微動だにせずにそのまま続いていくのであり、そのことを、われわれの誰もが自明のこと

として識っているはずである。それこそ、世界の定義の根本的な一部なのである。

おそらく、この圧倒的な不均衡こそ、人間に、哲学の仕事——そして同時に、さまざまな宗教や芸術活動——を発動させる根本的な契機であるのかもしれない。われわれは、世界とのこの圧倒的な不均衡の関係を均衡に持ち込むために、真理を、神を、美を発明する必要があったのだと言うこともできるかもしれない。わたしは世界を認識するが、しかし同時に、さすがに北国の夜とはいえもうすっかり遅くなつてほとんど闇に溶け込む前の最後の青を湛えた空を低く舞っているあの数羽の蝙蝠や、窓の向こうでまだ静かにそよいでいるプラタナスの葉叢のように、世界に溶け込んで存在するのではなく、その認識の明のせいで、逆に、圧倒的な不均衡そのものを自覚しないわけにはいかないのだ。わたしは世界の内にいるが、しかしそれだけでは、わたしはまだ、完全には世界に帰属してはいない。わたしは、けつして世界のすべてを識り、知ることがないのだし、また、単に、そのような量や範囲というだけではなく、世界を世界として成立させているその根本的なあり方も分らない。世界は、その世界としての存在のうちに核心的な秘密を保持しているように思われるのに、しかしその秘密からわれわれは完全に締め出されているのだ。

わたしは世界の内にいるが、しかし世界の秘密からは遠ざけられている。世界にはそこ

らじゅうにいっぱい秘密が隠されているように思われるのに、わたしはその秘密には参与していない。それゆえに、わたしはけっして完全には世界に帰属してはいないのだ。わたしは、世界の内にありながら、しかし世界に帰属しそこねていると言ってもいい。だからこそ、人間にとっては、世界への帰属はつねに問題そのものとなるのである。わたしは、世界の内にありながら、しかし世界の存在と、そこに明の開けとしてあるわたしの存在とのあいだの根源的なずれ、不均衡、非帰属性を、その明の可能性そのものにおいて自覚しないわけにはいかないのだ。それは、同時に、わたしには、わたしがどうして、このように世界の内にいるのか、どうして《いま、ここ》において存在しているのか、必然的な根拠を見出すことができないということでもある。なるほど人間社会の内という範囲でなら、わたしがどのような経緯で、いくつもの偶発事をつづり合わせるようにして、《いま、ここ》に至ったのかを、物語Ⅱ歴史風に語ってみせることもできるだろう。しかし、それを超えては、わたしは、世界のなかに根をおろすような仕方のみずからの存在の根源的な理由を知らないし、いや、どっちにしてもそのようなものなどないかもしれないのだ。

いづれにせよ、世界の存在は、はじめから、圧倒的に、自明であるが、しかしその広大で確固とした自明性に比べて、わたしの存在はなんと偶発的で、とるに足らず、曖昧なの

だろう。コギトであれ、超越論的主観性であれ、はてまた別の言い方を借りるのであれ、わたしが——さて、どのようにしてか?——《いま、ここ》に存在することは、少なくともわたし自身には、確かで自明だが、しかしその自明性は、わたしを包み込んでどこまでも広がるこの世界の圧倒的な自明性のもとでは、なんと不安定で頼りなく、はかないものだろう。わたしの存在は、この圧倒的な世界の現存の内にあって、ひとつの明るい影のようなものではないか。しかも、この影は、確かに夜も更けてくれば、もうすぐ眠りに落ちるのだから、日ごとに、目覚め、眠り、絶え間なく明滅している影なのではないか。

目覚めているわたしがどれほど明るい意識を保持することができたとしても、その明は、十数時間もたたないうちに、まるでみずからの内に引きこもっていくように閉ざされてしまう。コギトは眠るのだ。すると、コギトはあんなにも確信していた自己の存在 (sum)すらも失って、まったくの無になってしまう(いや、眠りの世界にも夢という無数のイメージの流出の境域が広がってはいるが、それはまた、もう少し先の話だ)。しかし、そのようにわたしはわたしを失い、ほとんど無となって眠るのだが、しかしそのあいだにも、世界はそのまま同一のものとして変転し続け、存在し続けることを、わたしはあらかじめ確信している。眠りに落ちるとき、誰も世界がそこで失われ、消えてしまうと怯えはしな

い。むしろなにか途方もなくなつかしいものにみずからを委せるかのように、わたしはほとんど安心しながら、眠りに落ちていくのだ。むしろ不安こそが眠ることを妨げる。

そして、朝、眼が覚めるとき、われわれは世界をふたたびそのまま見出すことにけつして驚愕したりはしない。前夜、眠りに落ちたときに認識した世界の最後の光景と、翌朝、目覚めたときの新しい光に満ちた世界の光景とでは、もちろんすっかり様相が変わってしまったているが、しかしわたしは、思いがけずたくさん寝たとびっくりすることはあっても、そこに同じ世界がまた拡がっていることを少しも不審には思わない。もちろん、知らぬ間に薬剤を投与されて、その間に人為的に見知らぬ場所に移され、眼が覚めたとき自分がどこにいいのか分からないで慄く^{おの}ということは極限的にはありうるだろうが、それでもわたしは自分が、見知らぬ違う場所とはいえ同じ世界の内にいるという圧倒的な感覚を失いはしないだろう。わたしが眠り、わたしの意識の明が閉ざされている間にも、世界はそのまま続き、変化しつづけ、変化しながら同じものとして存在し続けているということを、わたしはわたしの意識の奥底ではけつして疑うことはないのだ。

その限りでは、眠っているわたしと世界とのあいだには、しっかりとした共犯の関係があると言うべきかもしれない。わたしはわたしの身体をすっかり安心して世界へと委ねて